

社会で通用する基礎力を高め 多様なプロジェクトで 現場に強い管理栄養士・栄養士が育つ

教員と学生の距離の近さが 専門職の基礎力を育てる

大阪樟蔭女子大学 (大阪府東大阪市)

大阪樟蔭女子大学健康栄養学科の教育を語るうえで、まず触れなければならないのが、教員と学生の距離の近さだ。1年次から5人6人に1人の教員がつく小担任制(アドバイザー制度)を導入し、学修面だけでなく生活面や進路についてもきめ細かくサポートする体制を整えている。井尻吉信教授は、「本学は助手の数が多く、教員一人一人に対する学生数が少ない。日常的に学生一人ひとりの変化に気づき、声をかけられる環境がある」と語る。オープンキャンパスで在学が大学の魅力として挙げる点も、「教員との距離が近いこと」が大きな割合を占めるという。

教育の柱の一つが、卒業研究の必修化だ。4年次に1年間をかけて研究に取り組み、課題を発見し、仮説を立て、検証し、まとめる。この一連のプロセスは、現場で求められる思考力そのものでもあら

る。「負担は決して軽くありませんが、その分、学生は大きく成長します。研究を通して身につけた力や経験は、就職活動でも、社会に出てからも確実にプラスになると井尻教授は強調する。

さらに、希望者を対象とした近森病院(高知県)との連携プログラムも特徴的だ。正規カリキュラム外ではあるものの、面接で選ばされた学生が1週間、最先端の医療現場に身を置く。病院就職を志望する学生にとって、貴重な学びの機会となっている。

臨地実習への取り組みも、現場から高い評価を受けてきた。かつて大阪府下の公立病院管理栄養士の集まりから「大阪樟蔭女子大学の実習教育について話してほしい」と要請を受けたことがあるという。その理由は明確だった。「目的意識がはっきりしており、礼儀や社会人としての基礎力が身につけている学生が多い」という声だ。

背景には、3年次初めに行う「臨地実習合同事前指導」がある。実習などに真面目に取り組む姿勢——社会人としては当たり前のこととあえて言語化し、全員に確認させる。「その日を境に教員の雰囲気が一気に引き締まるので、学生からは『厳しい』と言われる」と井尻教授は笑みを浮かべる。しかし卒業後には、「臨地実習時に教えていただいたことが生きていく『社会に出てからは当たり前のことばかり』という声が多く寄せられるという。

実践と挑戦を重ね 自ら成長する力を引き出す

カリキュラムは、基礎から応用へと段階的に積み上げる構成だ。カリキュラムマップを用い、どの科目がどの力につながるのかを可視化している。学生が最も大きく変化するのは、臨地実習と卒業研究の時期だという。「目の輝きがまったく違う。毎年、『ここまで



鈴木朋子学科長(左)と井尻吉信教授

変わるのか」と教員側が感動する瞬間がある」と井尻教授は語る。

その成長を後押ししているのが、課外活動として展開されているプロジェクト群だ。「コルクプロジェクト」は、学生自らがキャンパスライフの質(QOL)を高めようと活動する取り組みで、健康栄養学科から50人以上が参加している。オープンキャンパスでのマントーマンツァーをはじめ、附属幼稚園でのアレゲンフリー菓子づくり、企業や店舗とのメニュー開発、地域清掃や高齢者向けセミナーなど、活動は多岐にわたる。

一方「Shineプロジェクト」は、スポーツ栄養をテーマにした実践型の学びだ。中学・高校の運動部選手を対象に、学生がセミナー開催やレシピ開発、情報発信を行う。調理動画やレシピはSNSやクックパッドでも公開され、1万5000件近いアクセスを集めたがボランティアとして現場に立ち会う。管理栄養士が地域住民と向き合う姿を間近で見ると、将来像を具体化する大きな材料となっている。

国家試験対策も手厚い。4年次になると土曜日はすべて対策授業を実施し、直前期の1〜2月は平日ほぼ毎日講座を行う。成績や学習面で不安を抱える学生には、ゼミ教員が個別面談で伴走する体制をとっている。

最後に、鈴木朋子学科長は学科の目指す人材像についてこう語る。「高い知性と豊かな人間性を兼ね備え、社会に貢献できる管理栄養士・栄養士として輝いてほしい。そのためには、課題を発見し、解決策を総合的に考える力が不可欠です。コルクプロジェクトやShineプロジェクト、大学院やくすのき健康栄養センターといった環境は、研究と実践の両方の視点を自然に身につけられる場でもあります」

「挑戦し続けてほしい」という教員のメッセージのもと、学生たちは学内外で一步を踏み出す。大阪樟蔭女子大学健康栄養学科の教育は、専門職としての確かな基礎力と、未来を切り拓く挑戦心を同時に育んでいる。



学生自らキャンパスライフの質を向上させていこうとするコルクプロジェクト

個別面談指導の様子

中河内お土産プロジェクト

樟蔭幼稚園お菓子作りチーム

人気コンテンツも生まれている。「強豪校の運動部でも、栄養面は手つかずというケースは多い。学生がボランティアとして関わることで、学びと社会貢献の両立が実現している」と井尻教授は評価す

る。進路教育にも早い段階から力を入れていく。1年次には「アカデミックスキルズ」という科目を通じて、大学で学ぶための基礎力とともに、病院、給食、食品企業、栄

養教諭など多様な進路を広く知る機会を設けている。地域連携の拠点である「くすのき健康栄養センター」では、特定保健指導や介護予防教室、健康イ